

# 最新事情

高校編②

生徒一人一人の興味関心から目標を定め  
その方向へと道を作る

## 神戸市立

## 六甲アイランド高等学校

(兵庫県神戸市)

神戸市立六甲アイランド高等学校は、新しい時代に向けた神戸市の高校教育におけるパイロットスクールという位置付けで、市立の神戸商業高校と赤塚山高校が統合再編し、阪神淡路大震災後の平成10年に普通科総合選択制高校現在普通科単単位制として新設された。早い段階で将来の生き方を定め、目標に向かって自主的に学ぶ同校の教育について伺った。

### 興味関心の方向を 早くに自覚させる

六甲アイランドの南部に建つ神戸市立六甲アイランド高等学校は独特の教育方針を持つ学校だ。ゆとりのある空間をふんだんに取り入れた校舎では全校1080人の生徒がそれぞれの進路に向けて学んでいる。

普通科単単位制の同校では、生徒たちが本当に学びたい授業を選択して受けることができる。ただし、生徒に自由に選ばせると脈絡のない時間割になってしまうため、「社会科学」「国際人文」「総合科学」「芸術」「国際情報」「情報科学」「人間科学」の七つの系を設定している。

同校の生徒に望むことを、菱田浩校長は次の

ように説明する。

「本校は、夢を受けとめ夢をかなえる学校です。ですから、中学生のうちに、自分はどうなりたいという夢を持って入学してもらいたい。もちろん、それほど固まった目標ではないかもしれませんが、1年生の間に方向を固めて、そして2、3年生はそれぞれの興味関心や将来の目的に向けた科目を学びますから、入ってから考えようというのでは遅いのです。このことはすでに周知されており、近年では目的をはっきり持って入学する生徒が多いようです」。

同校の特色ある科目の一つに、3年間を通して学ぶ「進路プランニング」がある。ここでは、キャリア教育の視点から心理学や職業適性検査、企業人の講演などを取り入れ、将来の進路と自分との関わりを学ぶ。1年生では身近な人への職業インタビュー、2年生はオープンキャンパスに行くといった宿題もあり、生徒が能動的に活動し、現在の学習と高校から先の社会との関わりを考える機会も作っている。

「この授業で考えることが、生徒一人一人の、系の選択や将来の進路にもつながっていきます。本校では将来を見据えた本当の意味でのキャリア教育を前提に、生徒の興味関心や望む生き方、働き方をまず明確にするとそこから始め、ではどうすればそれが実現できるかという筋道を立てていくのです。1年生からこの観点で考えることで、比較的、目的意識の高い進路選択が実現できるのではないかと思います」と



広々とした敷地に建つ校舎はまだ真新しい

菱田浩校長



国際情報系主任で「秘書実務」も担当する渡邊眞一先生

国際情報系主任である渡邊眞一先生は話す。

同校のもう一つの特徴ある授業は2、3年次で行う「神戸学」だ。地元・神戸についてさまざまな観点から調査研究するという活動であり、系の中で何グループかに分かれ、それぞれテーマを決めて取り組んでいる。3年生の秋にはその成果を発表する「神戸学全体発表会」を開催し、近隣の大学の教授なども招いて審査も行うという。

「『神戸学』」には、単なる調べ学習以上の成果も期待しています。研究というからには何かオリジナルリティがほしいし、企業との連携や、こちらから提案するといった、何かを生み出す活動に近付けるのが目標なのです。これまで国際情報系では地元企業と共同でマンゴープリンを製造販売したり、芸術系ではアートイベントのマスケットを行政に提案したりという取り組み

もありました。系によっては伝統的に引き継いでいるテーマもあり、総合科学系では、学校付近に生えている『巨大タンポポ』について数年かけて調査しています」（渡邊先生）。

それぞれの系での学びを生かす「神戸学」は、一般科目や学校生活で得た力の集大成という位置付け。ここに全力を注ぎ、進学の面接などでもその成果をアピールする生徒も多いそう。

## 社会人の行動に興味を持つ生徒たち

同校では、2、3年生の商業系の選択科目に「秘書実務」を設け、秘書検定3・2級を受験している。平成22年度は優秀な成績を収め、文部科学大臣賞を受賞した。指導に当たるのは渡邊先生と白石美奈子先生、釋水明章先生、笹部敬子先生の4人だ。4〜6月は3級受験を目標に参考書や過去問題を利用して座学中心で学習し、それ以降は11月の2級受験を目標にしながら、合間合間にパソコンで作った名刺を交換したり、電話応対、お茶やコーヒーの入れ方、出し方などの実技も取り入れている。

今年には約60名の生徒が「秘書実務」を選択しており、3ク



ラスに分けているため1クラスの人数は20名程度と少数だ。取材した日は、電話応対のロールプレイングが行われた。

電話応対での言葉遣いを復習した後、電話機を使って隣の席の生徒とやりとりをする。1組ずつ白石先生が指名し、応対のロールプレイングを行うが、基本のやりとりの後は「かけ手（お客さま）が名乗らなかつた場合」「かけ手の名前が聞き取りづらい難しい名前だった場合」「取り次ぐ相手が不在の場合」など状況を変え、「こういう場面ではどういう言葉で言えばいいでしょうか」と生徒に受け答えを考えさせる。生徒たちはこれまで習った知識を絞り出し、できないところは白石先生がその都度、ふさわしい言い方を引き出していく。



白石美奈子先生が指導する「秘書実務」。電話応対のロールプレイングではとっさに答えを考えるのが難しく、生徒たちは四苦八苦



「秘書実務」で秘書検定を学んだ生徒の皆さん。  
後列右から三木春奈さん、遠藤愛美さん、  
前列右から大西みづきさん、石脇健斗さん、本多優子さん



50分の授業だが、人数が少  
ないため全員がロールプレ  
ィングをする余裕があった。座  
学ですでに学んでいても、実  
際の場面を想定するとそれぞ  
れに柔軟な対応をしなければ  
ならないため、難しさを実感  
したようだ。

生徒に対し、「知らないこと  
に対する好奇心を強く感じる」  
と白石先生。「電話応対や冠婚  
葬祭のマナーなどは、知って

いると少し大人になった気分になるのでしょ  
う。実際に社会人として実践する機会はすぐに  
はありませんが、学んでおくといざというとき  
に、スムーズに対応できると思います。冠婚葬  
祭などは、結婚式やお葬式に行ったという実体  
験として持っている生徒が多く、例えば『お葬  
式で真珠のネックレスをするのは真珠が涙の宝  
石と言われているから』『二重の苦しみという  
意味になつてしまうから、2連のネックレスは  
駄目ですよ』といった話をする、そんな意味  
があったのか、そうすればよかったのかと自分  
の体験を重ね、「面白く感じるようです」。

毎年、男子生徒も数名が「秘書実務」を選択  
しており、熱心に取り組んでいるようだ。渡邊  
先生は、「私は元は県職員だったのでですが、県  
庁では男性の秘書も多くいましたし、秘書課長  
も男性でした。選択科目の説明をするときには、

実際には秘書業務を行っている男性がたくさん  
いることを話すと、男子生徒も興味を持つよう  
です」と言う。

## いずれ出る社会で 必ず役に立つ力を育成する

「秘書実務」を選択した生徒にも話を聞いた。  
小学校の教員を目指す遠藤愛美さんは、2年  
生の時に秘書検定3、2級に合格し、今年準  
1級合格を目標にしている。「準1級になると  
状況設定が複雑になり、実際の社会での知識が  
必要になるように思います。学校だけでなく  
もっと社会人の人と接する機会を持って、知識  
を深めていきたいです」。

三木春奈さんは、敬語が苦手、今のうちに  
きちんとマナーを知っておきたいとの思いから  
選択した。「電話の取り方や職員室に先生を訪  
ねる時の言葉遣いなど、普段から気を使うよう  
になりました。大学生になったらアルバイトを  
して、年上の人と一緒に働きながら、早く社会  
人として通用するようになりたいです」。

ラグビー部に所属する石脇健斗さんは、「電  
話の受け答えやあいさつの仕方を学べたのがよ  
かった」と話す。「立ち止まって相手の目を見  
てあいさつするように心がけています。言葉遣  
いは難しいけれど、他校の先生や保護者の方に  
も意識して敬語を使うようになりました。やっ  
ておいて損はしないと実感しています」。

大西みづきさんは、先輩や昨年選択していた

友達の話聞いて、秘書検定に興味を持ったと  
いう。「結婚式の招待状への返信や祝儀袋、い  
ろいろなあいさつの言葉など、秘書でなくても  
普通に生活していく上で役に立つことがたくさ  
んありました。敬語は将来絶対必要なのできち  
んと使えるようになりたいです」。

秘書検定を学ぶまで、社会のことは知らない  
ことばかりだったという本多優子さんは、「将  
来役に立つかなと思いつきました。今やって  
いる電話応対は、右手でペンを持って左手で受  
話器を取ることも、受け答えの言葉も難しいで  
す。でも将来どこでも使える技能だし、難しい  
のも面白くてやりがいがあります」。

具体的な職業を目標にしている生徒も、進学  
してさらに興味のある分野で学びを深めたいと  
いう生徒もいる。生徒たちの話からは、「秘書  
実務」をはじめ、同校での学びから得た知識や  
力が将来に役立つものであることをしっかりと  
認識しているのが伝わってきた。生徒のほとん  
どが大学や専門学校に進学するそうだが、いず  
れは必ず社会に出て働くのだと、よく理解して  
いるようだ。

同校のOB・OGについて菱田校長はこう語  
る。「彼らの姿を見て、この教育体制の価値は  
高校卒業後すぐではなく、社会に出て30代を越  
えてから真に花咲くのではないかと感じまし  
た。今の生徒たちもそうやってくれるのを楽し  
みにしています」。生徒の未来に対する期待は  
大きい。